

資 料

通常の学級に在籍する肢体不自由児に対する 後転運動における支援教具の作成

坂 口 達 哉*・笠 原 芳 隆**

1. はじめに

近年インクルーシブな教育が推進される中、小中学校の通常の学級に特別な支援が必要な障害のある児童生徒が在籍するようになってきている。筆者は学校支援プロジェクトを通して、学習指導要領に則って編成される教育課程に基づいて各教科等の学習を通常の学級や学年単位で行ったり、全体で学校行事に取り組んだりするなど、インクルーシブな授業を行っている小学校の通常の学級に在籍している肢体不自由児童とかかわりをもった。

一般的に授業を通して肢体不自由児童が定型発達児童と共に学ぶ際の課題として、特に体育や図画工作、家庭科といった実技教科を学ぶ際の手立てや合理的配慮といった支援が求められる。こうした課題を解決するための支援の一例として、体育における器械運動の単元での「後転運動」に着目し、肢体不自由児童だけではなく、授業に参加する児童全員が活用でき、楽しさを感じられ、授業に意欲を持って後転の動きを習得できる支援教具を開発し、その効果を検証した。後転ができたことによる達成感及び児童一人一人の主体性や自信に繋がる支援教具となるように考案した。

2. 支援教具活用の実際

(1) 対象児童の実態

5・6年生が在籍する通常のかつ複式学級（在籍児童数14人）に籍を置く6年女子児童（2024年4月現在）。左上肢（腕部）に障害がある。ただし手指自体は機能していて、紙やプリント類、ペンなどの文房具を左手指で掴むことができる。とても積極性があり、健常な利き手である右手を使い自分でできることは自分で行おうとする。さまざまな授業や学校生活で授業の準備や片付けなど、どうしても両手を使用しなければ難しいことは、友だちや教師に援助を求め対応している。

一方体育等の実技教科の授業の際は、学習活動における動作が上手くいかずに葛藤して、活動への取組に消極的になるなど、授業への参加における主体性が課題となる様子が見受けられた。

(2) 課題整理

実態把握の結果から、対象児童が体育の授業に参加する際に、以下の2点が活動を行う上での困難さに繋がると考えられた。

一つ目は「身体のバランスや体幹部の支持」についてであ

る。対象児童は上肢に困難さを抱えるため、文字を書く際に前傾姿勢になったり顔が机に近くなったりしてしまう。このことが体育の授業を行う際にも影響を及ぼすと思われた。

二つ目は、片腕で体重を支持したり物を持つことの困難さである。肢体不自由のある児童にはさまざまな動作に困難がみられる場合が多く、対象児童も器械運動の授業場面において片腕で身体を支えきれず、頭部を打ちつけてしまうなど、実際に小さなケガをしたり器械運動に対して恐怖や抵抗感を抱えたりしている様子が見られた。

(3) 作成した支援教具

後転運動に対して後ろに倒れる力が少なくても、転がりやすいようにすること、および恐怖や抵抗感を緩和できるようにすることを念頭に、支援教具を作成した。過去に跳び箱の授業で使用したことのある踏み台を活用した。

高さは5cm・10cm・15cmで、それぞれ赤・青・黄に色分けされている。踏み台の上に、現在使用されていない卓球台の天板を乗せて傾斜をつくり、その上にマットをかぶせた。作成した教具を図1～3に示した。

(4) 支援教具の活用に向けた支援者のかかわり

対象児童に対して、まず実際に筆者が支援教具を活用して後転のモデルを提示し、その後対象児童に後転運動の実践を促した。対象児童が実践する中で「惜しい!」、「すごく手のつき方がよかった!」など、具体的に賞賛等の声がけをしながら、雰囲気盛り上げて意欲向上を図りながら支援を行った。3種類の踏み台の高さの違いを生かして、対象児童にどの高さ（傾斜）で挑戦するかを選択してもらうこととし、対象児童の主体性を促した。補助が必要だと申し出があった時は横に反れないように補助を行い、何も申し出が無いときは見守って手のつき方や後ろの倒れ方などフォームを中心に観察した。



図1 高さ（傾斜）の大きい支援教具

* 上越教育大学大学院専門職学位課程

** 上越教育大学



図2 中程度の高さ（傾斜）の支援教具



図3 高さ（傾斜）の小さい支援教具

3. 授業の実際

授業の流れとして、後転運動の前に「ゆりかご」や「V字バランス」など器械運動に入る前段階の技を全体で行い後転運動の練習に入って行った。

作成した支援教具の活用に対して、対象児童は当初、恐怖感や周りとは違う活動を行うことへの戸惑い、不安感を示したものの、1番高さがある傾斜が急な、15cm（黄色）の教具を自ら選択して練習を始めた。初めは回り切れずに背中から下方向に擦り落ちたり、右手を上手くつけなかったりしていた。しかし、対象児童から「普通の床より手が付きやすい」と応答があったため、手をつく位置をアドバイスするだけでなく、顎に赤白帽子を挟むなど頭を体に入れることの促しを行った。すると、15cmの傾斜で後転することができた。担任も周りの児童も対象児童が後転できたことを称賛し、対象児童自身も後転ができたことで笑顔が見られた。

15cmの高さのある支援教具でできた後も、繰り返し後転運動の練習を行い、それで自信をつけてから、10cm（青）、5cm（赤）とより床に近い高さの支援教具での練習を促した。15cmの支援教具で後転運動ができたという自信を持った状態で、10cmや5cmの支援教具でも後転運動をすることができ、最終的に支援教具を活用せず、何も高さ（傾斜）がない体育マットの上での後転運動をひとりでできるようになった。

段階的に高さ（傾斜）が小さくなるような手順で支援教具を活用したことで、最終的に後転運動が平坦なマット上でもできるようになったことから、支援教具の活用の有効性が認められたと言えるのではないかと考えた。それに加えて筆者の方で賞賛の声がけをしたり、他の児童に披露する機会をもうけたりす

ることで、やりがいや達成感を味わうことができたことが影響した可能性も考えられた。さらに後転運動に対して苦手意識を抱える児童が他にもいたことで、お互いに助け合いながら技の練習を行うことができたことも達成した要因として挙げられた。

4. おわりに

後転運動ができてからは、開脚後転などの発展種目も積極的に練習する様子が見られた。今後中学・高校と進学していく中でも、対象児童本人が体育をはじめとする実技教科の学習活動に臆することなくチャレンジできるようになることが望ましい。それに向けて支援者である教師が、合理的配慮として対象児童の上肢障害の実態に合った活動内容や教具を準備するなど柔軟に対応していかなければならない。そのために教師は対象となる肢体不自由児童生徒が実技教科の授業場面でどんな困難を抱え、どのような方法でそれが克服できるか常に情報収集していく必要がある。

参考文献

- 石田修（2017）通常の学級に在籍する肢体不自由児が必要とする合理的配慮～やりにくさや不便さを感じる場面とその配慮事項の検討～. *Journal of Inclusive Education*, 3, 57-64.
- 笠原芳隆（2018）肢体不自由（運動障害）. 河合康・小宮三彌（編）. わかりやすく学べる特別支援教育と障害児の心理・行動特性, 北樹出版, 115-126.
- 葉石光一（2022）肢体不自由児の理解と支援. 大庭重治（編）. 特別支援教育の探究, ミネルヴァ書房, 78-97.